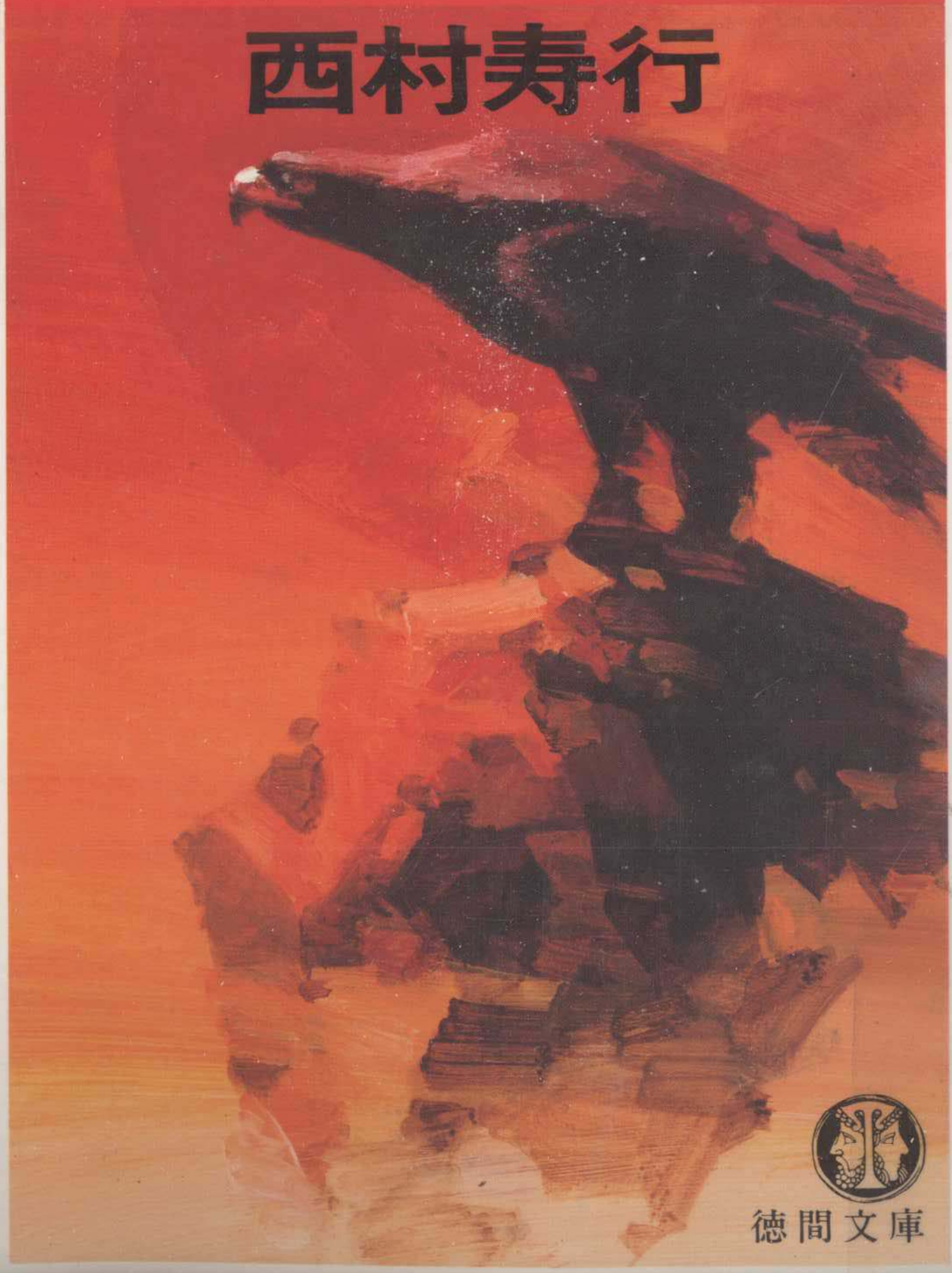
涯の鷲

西村寿行



徳間文庫

徳間文庫

涯の鷲

© Jukô Nishimura 1993

著者　西村寿行
発行者　徳間康快
発行所　東京都港区新橋四―一〇―一〇五　株式会社徳間書店
電話（〇三）三四三三・六二二三一（大代）
振替　東京四―四四三九二番
印刷　凸版印刷株式会社
製本
〈編集担当　芝田　暁〉

1993年5月15日　初刷

ISBN4-19-587584-6（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

徳間文庫

涯の鷲

西村寿行

徳間書店

目次

第一章　名無し部隊（コードレス・セクション）　5
第二章　スパイ・ファイル　55
第三章　殺しの序章　127
第四章　老いた狩人（ハンター）　175
第五章　ジャガー・ノート　223
第六章　光る大地　284
第七章　魔神　372

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第一章　名無し部隊（コードレス・セクション）

1

人斬り伊造は朝日岳に登っていた。

妖子と一緒だった。妖子は伊造がつけた芸名であった。

人妻でこれから伊造の飛竜組が経営する特殊浴場（ソープランド）に勤める。飛竜組には幾久という若者がいる。女が専門だった。幾久は苦味ばしった容貌を備えていて堂々たる美男子。目をつけた女の九割はものにする。人妻であろうとなかろうとだ。女にかけては天賦の才があった。ものになるかならないかが一目でわかる。伊造はその非凡の才にただただ、敬服するのみであった。

幾久はものにした女を飛竜組のソープランドに送り込む。

もちろん、ものにはしてもソープランドには送り込めない女もいる。そうした女でも別れる前にたいていは親分の伊造に回す。女は幾久が飛竜組の組員でジゴロだとわかるとおびえに竦

む。売りとばされるかもしれないしトラブルは必至だからだ。人妻となるとなおさらだ。おだやかに別れてもらえるとなれば親分の伊造に性を提供する条件を拒みはしない。

伊造が組員の幾久に敬服し敬愛してやまないゆえんだった。

妖子も幾久がものにした人妻であった。昨夜、伊造の待つ寸又峡の温泉ホテルに送り込まれて来た。一夜をかけて伊造は妖子の体を隅からすみまで賞味した。絶品の女であった。容貌肢体も優れているが妖子には伊造がこれまで経験したことのない妖しさがあった。なんとはない立居振舞いにそれが滲み出る。伊造のみがそう思うのかもしれないがみていると引きずり込まれてしまいそうな気がする。妖子と名づけたゆえんであった。

明日は妖子は性技の専門家に渡さねばならない。人妻だから一応は心得ているがそれだけでは済まない。性交のハード・トレーニングを受けることになる。

――なんとも、もったいない。

妖子が先に山路を登っている。

その妖子のお尻の動きをみつめる伊造の眸が、病んでいた。

もちろん、幾久の所有物となった女だ。幾久には身心を捧げている。ソープランドで働くことになった妖子にはそれなりの稼がねばならない理由がある。そうではあってもソープランドで働く女にはその世界にいて陰で支えるジゴロが絶対に必要であった。それが幾久。幾久はこれからも妖子に君臨することになる。

妖子をそんな世界には堕としたくないと、伊造は病いを浮かべた眸でお尻をみていた。おのれだけの女にしたい。幾久は文句はいわない。幾久には何人もの女がいるからだ。それに幾久は人斬り伊造を尊敬している。別れる女でも働かせる女でもかならず伊造に差し出すのはその尊敬からだ。問題は妖子に渡す月額の手当であった。妖子ほどの女が湯女として肚を決めて稼ぎにかかれば月に二百万近くにはなる。伊造が独り占めするにしても最低月額で七、八十万は払わねばならない。

妖子は交渉には応じると伊造は思う。一日に六、七人の男の男根に仕えるのはいくら女であるにしたところで苛酷だからだ。酔っぱらいが来る。からむのが来る。客の素姓はいっさいわからない。病気の有無もわからない。弄ぶのも体位も好き勝手。膣は痛むし膚は湯で荒れる。屈辱などは捨ててかかっても客の態度によってはときにむかつきは抑えられない。カネと引き替えの地獄であった。

――七、八十万円か。

捻出方法を伊造は思案していた。

伊造の飛竜組は焼津市が本拠地。

人斬りと冠せられるまでに伊造は暴れた。焼津を本拠に東は静岡市から西は掛川市まで勢力圏を拡げにかかった。そのために関西広域暴力団の傘下にある権堂組とこれは静岡独自の暴力団、鬼頭組と太田村一家の連合軍との嚙み合いがはじまった。鬼頭組は静岡市を牛耳っている

大物で太田村一家と兄弟の関係にある。鬼頭組は総力を挙げて飛竜組潰滅にかかった。権堂組も横槍をつけて来た。飛竜組は巨大な力に狩りたてられて破滅の縁に追い込まれた。

そこへやって来たのが〈鷲〉の伊能紀之と中郷広秋。

伊能と中郷はもと警視庁公安特科隊の隊長で〈死神〉とマスコミにこぞって攻撃された。日本を潰しにかかったテロの巨魁で狂人の僧都保行との戦いで死人の山を築いたからだ。伊能と中郷は警視庁・警察庁と大喧嘩をやり、テーブルを引っくり返して警察を辞めた。以来、伊能と中郷は鷲となってその強靭な翼で世界にはばたいた。

その伊能・中郷が暇をもて余してサロン・クルーザー・孤北丸なるものを購入して焼津港にやって来た。

焼津港に不法繋留してあろうことかクルーザーを提灯で飾って飲み屋をはじめた。

飛竜組がクルーザーに乗り込んだ。伊造も胴田貫を引き抜いた。伊造が大刀を抜いたらただでは済まない。しかし、結果はあっという間に全員が海に叩き込まれた。

クルーザーの狂人が伊能・中郷と知って仰天した伊造はただちに押しかけ子分となった。

権堂組は伊能と中郷にあっさり潰された。鬼頭組と太田村一家は飛竜組の一家となった。伊能と中郷がついているから広域暴力団といえども飛竜組には手が出せない。

飛竜組は泰平の世を迎えていた。

七、八十万、もしくは百万でも捻出できないわけではない。

一人の女を完全に膝下に敷くのだから考えてみれば百万円は安いかもしれない。ましてや相手は妖子。この機会を逃したら妖子のような女には二度とは遇えないおびえが伊造には強い。

妖子の特徴を一言でいえば奥が深いに尽きる。弄んでも弄んでも伊造の欲望には果てしが来ない。思いのたけの射精をしても妖子への思いは尽きない。愛撫・射精ではけりのつかない奥深さが妖子にはある。体の芯にもう一人の妖子、すなわち女の精が潜んでいる気がする。

いまの伊造はめったに組には貌を出さない。幹部にすべてを任せて生臭いことからは遠ざかっている。妖子が承諾するのなら組を譲って二人だけの生活に入ってもよいとさえ思う。

呆けた眸で妖子のお尻をみながら伊造は山を登った。

伊造は妖子に仕えていた。

登山道を外れた岩場だった。妖子は脱いだ服の上に横たわっている。伊造は乳からはじめた。足の指に回っていまは太ももに唇を這わせていた。充分すぎるほどに発達した脚であった。真白い膚が夏の陽を跳ねている。妖子は太ももを拡げきっている。低いあえぎを放っていた。微風が陰毛をかすめている。揃って天を衝く剛毛群であった。女のいのちをたたえて黒々とした艶をみせている。なかばまで膣は開いている。男を狂わさずにはおかない女の芯がその奥に通じている。

膣は最後にして伊造は妖子をうつぶせにした。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

盛り上がったお尻を両手で抱えて伊造は口をつけた。大自然の中で心ゆくまでの裸身の賞味。ホテルのベッドでは得られない生きた裸身。それを求めての登山であった。すべてを陽のもとに解放するその妖しさに妖子も昂ぶっている。伊造も全裸。冷たいお尻を抱えた伊造には安堵があった。

――親分さんにそうまでおっしゃっていただけるのなら。

妖子は月額百万円で伊造の女になることを承知した。

もうこのお尻は伊造のみのものであった。

「ああ――親分さま――」

妖子は低い叫びを口にした。

妖子はお尻を高くかかげさせられていた。

伊造がお尻を拡げて肛門に舌を入れている。堪えがたいおののきがあった。いまに怒り立った男根が肛門も膣も責める。口も責められる。一夜をともにしただけだが妖子は伊造を嫌いではなかった。名にし負う飛竜組の組長でもあった。月額百万円ならいうことはない。妖子は性欲が強い。カネのためにソープランドに勤める決意をしたのだがその決意とは裏腹に一夜に何人もの男に犯されることへの興味がないわけではなかった。もちろん、興味はたちまち褪せて苦痛に変わることは承知していた。体を洗っても洗っても男根が待っている世界にどこまで堪えられるかは、自信がなかった。

伊造が百万円で所有してくれるという。願ってもない申し出であった。
幾久に誘われて体を任せたときから夫とは縁を切ったつもりになっていた。
ソープランドに働きに出る妻をどうにもならない夫であった。人斬り伊造の妾になったら夫はおびえるだけであった。心に残るのは幾久との情事が禁止されることだけであった。
暴力団の親分だから、人斬り伊造だから、陽光のもとでだれにおびえることなく情事を愉しむことができる。ほかの男とならこんな大胆な性交はできない。全裸でのこんな姿態を取ることはできない。複数の男にみられたらただでは済まないからだ。

ヘリコプターがやって来て低い上空を旋回した。
妖子は跪いて伊造の男根を口にしていたところだった。
ヘリコ相手では伊造も喧嘩にならない。失せろと手を振った。妖子には口腔性交をつづけさせた。妖子は伊造の申し出に眸を輝かせた。心から親分さまの女になりますと誓った。交替して伊造の尻を舐め回し肛門にも舌を入れて来た。忠誠の証と伊造は受け取った。
ヘリコは狙いをつけて来たように執拗に旋回した。
山中にヘリコが出現したことに伊造には訝しさがないわけではなかった。しかし、無視した。逆に妖子を誇示する気になった。妖子を這わせて豊かな尻を抱え、ヘリコを見上げさせた。

図々しさに呆れたのか、ヘリコは翔け去った。

伊造は本格的に責めにかかった。妖子はヘリコにみられながら四つん這いにされて責めを受けはじめたことで異様な昂ぶりに襲われているようだった。男さま！　男根さま！　と叫び、高いあえぎを放ちつづけている。その感受性に伊造も引き込まれた。妖しいまでの裸身とその感受性ごと妖子は伊造の所有物であった。

その叫び、あえぎを、ライフルらしいいきなりの乱射音がすぐ間近で切り裂いた。

「危い！　急げ！」

伊造は服を摑んだ。

妖子に魅せられていてそれまでは気にならなかったが黒塗りのヘリコの胴体にはナンバーも登録名もなかったことを、伊造は思い出した。ヘリコが性交を見物に来るわけはない。黒塗りの正体不明のヘリコに伊造が狙われるわけもない。それほど伊造は大物ではない。

――捲き込まれる！

正体不明のヘリコの出現につづく真夏の登山道近くでのライフルの乱射音とはただごとではない。

暴力団の抗争などとは桁のちがう巨大な組織の謀略戦に伊造には想えた。

そんな物騒なものに捲き込まれては人斬り伊造の名も通用しない。

――写真を撮られたかもしれない。

伊造に不安が湧いた。

飛竜荘。

伊造は飛竜荘に泊まっていた。飛竜組と看板は同じだがなんの関係もない。

寸又峡には飛竜橋という目の眩むほどに高い峡谷に架けられた鉄橋がある。そのせいもあって伊造は寸又峡温泉を贔屓にしていた。寸又川は深い峡谷が名物。峡谷の両側は高い絶壁で樅や栂などの原生林に覆われている。伊造は妖子を飛竜荘の特別室に招き飛竜橋に案内していた。

謀略戦に捲き込まれることなくホテルに逃げ戻って、伊造は安心した。

ホテルに戻って伊造は洋上の孤北丸に電話をかけた。

伊能がその電話を受けた。

「おい、中郷。親分が寸又峡で謀略戦に捲き込まれかけたそうだぜ」

伊能は上部甲板に出た。

「どんな謀略だ」

テントを張ったフライング・デッキで中郷は裸でアーリイタイムスを飲んでいた。

「朝日岳への登山道脇で親分は新たに妾にした人妻の尻を舐めていた。そこへ黒塗りの正体不明のヘリコがやって来て旋回をはじめた。親分は妾を四つん這いにさせて尻からぶち込んだ。これみよと、みせつけたわけだ。ヘリコは呆れて立ち去った。その直後にすぐ近くでライフル

の乱射音が沸き起こったそうだ」
「新しい妾にした人妻の尻か。よくやるな、親分も」
中郷は感心した。
久美と理都子が全裸で泳いでいる。透明度の高い黒潮に白い裸身が揺れている。久美も理都子も飛竜組組員の嫁だった。伊造親分が組員を口説いて二人を伊能、中郷の性交奴隷として差し出した。伊能と中郷は断わった。女などは煩わしいだけだ。しかし、久美と理都子は強引に孤北丸に棲みついてしまった。伊造が〝先生〟と呼ぶ飛竜組にとっては大恩人の伊能と中郷。憧れの余りに押しかけ性交奴隷になってしまったのだった。飯の支度と掃除だけではなくて久美と理都子は伊能・中郷以上に孤北丸の操船が上手だからなんとはなく棲みつかせている。もちろん、気が向けば尻を出させる。
〈母なる鷲〉事件で伊能と中郷は悪魔工房を支配する大狂人・僧都保行と戦い悪魔工房を潰して日本に戻った。孤北丸に戻ったら、待ち受けていた久美と理都子がやって来た。留守中はもとの亭主とやっていたのだという。伊造親分が選りすぐっただけあって久美も理都子も一応の容姿は備えている。しかし、大狂人の僧都よりも二人は始末に悪い。隙があったら股間に割り込む。男根に仕えたがる。ベッドには交替で潜り込む。昼も夜もたいていは裸でいる。尻も膣も見飽きていてその気にならないから伊能も中郷も飲んだくれてばかりいる。
「珍にして奇なる性格・性癖を持った親分だからな」

伊能はクーラーから缶ビールを取り出した。

母なる鷲事件は伊造が釣りに出て生きている巨大タコ爆弾を発見してから沸き起こった。

「それで？」

中郷。

「忘れろといっておいた」

舷側に泳ぎ寄った理都子の形のよい真白い尻を伊能は覗いた。

理都子は誘うようにその尻を動かしている。その向こうには久美が乳を出してゆっくり背泳している。鷗がその乳を覗きながら低く翔けている。

懈怠な夏が深まっていた。伊能も中郷もいまでは釣りもしない。ただ、洋上に船を浮かべているだけ。釣りをし、料理を作り、船室を磨き甲板を洗い流しエンジンの調子をみるのは久美と理都子。伊能と中郷はひたすらに飲んでばかりいる。

ミクロネシア群島の一つに設けられた悪魔工房を叩いてから約一年になる。イイダコ爆弾、マダコ爆弾の爆発でパニックに追い込まれた日本政府の要請で悪魔工房と対決した。緒戦でマダコ爆弾に孤北丸は粉砕された。政府が二十億円を投入して緊急購入した双胴型超高速新鋭艇・孤北丸Ⅱも機雷で粉微塵にされた。三隻目のいまの孤北丸は最初の孤北丸と同型のサロン・クルーザーに戻っていた。

大狂人・僧都保行は悪魔工房を出た。哄笑を残して地の涯に消えた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com